北村透谷
徳冨蘆花集

日本近代文学

日本近代文学大系 9

北村透谷集
徳冨蘆花集

解説 佐藤泰正
佐藤 勝
注釈 佐藤善也
佐藤 勝

角川書店

佐藤泰正（さとうやすまさ）

大正6年（1917）山口県に生まれる。昭和15年（1940）早稲田大学文学部国文科卒業。日本近代文学専攻。現在梅光女学院大学学長。主要著述『蕪村と近代詩』（昭37，梅光女学院），『近代日本文学とキリスト教・試論』（昭38，創文社），『文学と宗教の間』（昭43，創文社），『日本近代詩とキリスト教』（昭43，新教出版社）

佐藤善也（さとうぜんや）

昭和4年（1929）横浜市に生まれる。昭和28年（1953）東京大学文学部国文学科卒業。日本近代文学専攻。現在立教大学助教授。主要論文「透谷の初期文学評論」（「国語と国文学」昭29・1），「蓬莱曲の世界」（「国語と国文学」昭43・4），「『楚囚之詩』小論」（「国文学」昭47・3）

佐藤　勝（さとうまさる）

昭和6年（1931）香川県に生まれる。昭和29年（1954）東京大学文学部国文学科卒業。日本近代文学専攻。現在東京女子大学文理学部教授。主要著述『近代詩集の探究』（共著，昭37，学燈社），『近代小説研究——作品・資料』（共編，昭44，秀英出版），「『不如帰』の位置」（『東京女子大学創立五十周年記念論文集日本文学編』昭43），「戦後文学の出発」（「日本近代文学」9，昭43・10）

日本近代文学大系　全60巻　　第9巻　北村透谷・徳冨蘆花集

昭和47年8月25日　初版発行

注釈者　佐藤善也　佐藤勝

発行者　角川源義

印刷者　村沢達弘

製本者　鈴木俊一

別巻引換券は最終回配本まで
保存しておいて下さい。

発行所　株式会社　角川書店（かどかわしょてん）

東京都千代田区富士見2—13—3
電話東京（265）7111<大代表>
振替東京 195208
郵便番号 102

落丁・乱丁本はお取替えいたします　　帝国整版・旭印刷・鈴木製本

0395-572009-0946(0)

目

次

凡例　五
解説　七
北村透谷集解説　佐藤泰正　八
徳冨蘆花集解説　佐藤勝　二四
北村透谷集注釈　佐藤善也　四一
詩　四三
楚囚之詩　四四
蓬莱曲　六八
評論　一七五
時勢に感あり　一七六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「油地獄」を読む　一七九
心機妙変を論ず　一八五
人生に相渉るとは何の謂ぞ　一九三
内部生命論　二〇四
哀詞序　二二四
一夕観　二二七

徳冨蘆花集注釈　佐藤勝　二三一

不如帰　二三三

補注　四一九
参考文献　五一四
年譜　五二六

凡　例

一、本書には、北村透谷集として、詩「楚囚之詩」「蓬萊曲」（付「蓬萊曲別篇」）、評論「時勢に感あり」ほか六篇、徳富蘆花集として小説「不如帰」を収録した。

一、本書は、解説・作品本文、本文に関する注釈（頭注および補注）・参考文献・年譜をもって構成した。

一、本書の作品本文は次のように定めた。

透谷集

○「楚囚之詩」は同名の初版本（明22・4　春祥堂）復刻本（名著復刻全集・近代文学館）を底本とし、岩波書店版『透谷全集』第一巻（昭25・7）を参照した。漢字体はすべて初版本に従ったが、変体がなは普通の字体に改め、かなづかいは全集本に倣って整えた。

○「蓬萊曲」（付「蓬萊曲別篇」）は同名の初版本（明24・5　養真堂）を底本とし、岩波書店版『透谷全集』第一巻を参照した。字体その他の扱いは「楚囚之詩」と同様である。

○評論は岩波書店版『透谷全集』第一巻、同第二巻（昭25・10）を底本とし、字体、かなづかいはこれに従った。

○明らかな誤植は訂正した。

○新たにふりがなを補った場合は（　）で囲んで、底本のふりがなとは区別した。

蘆花集

○「不如帰」は同名の初版本（明33・1　民友社）復刻本（名著復刻全集・近代文学館）を底本とし、岩波文庫本旧版（昭13・7　蘆花の手入れした第百版をもとにしたもの）を参照した。意を用いた点は次のとおりである。

(1) 漢字字体は底本に従い、「叫・叫」「徃・往」のような混用もそのままにした。

(2) 変体がな、通用字もそのままにしたが、ふりがなの変体がなは普通字体に改めた。

(3)かなづかいは、本文・ふりがなとも底本に従い、誤用・混用もあえて改めなかった。
(4)ふりがなの有無は底本に従った。
(5)「密柑（正しくは「蜜柑」）」「旗下（旗本）」「避易（辟易）」のような誤植と、字のいれちがえ、脱字・衍字は訂正した。
(6)清濁音表記に混乱が見られ、かつ底本の印刷が不鮮明で、ふりがなの濁音半濁音が見分けがたいので、岩波文庫本を参照したほか、『言海』『辞林』『大日本国語辞典』を参考にして統一した。
(7)繰返し符号は「々」「ゝ」「ゞ」「〻」「〳〵」「〴〵」を用い、底本における用例の多いものに合わせて用法を統一した。

一、見開き二ページごとに本文の必要部分に一、二、三の番号を付し、それぞれについての注を各ページ上欄に収めた。それだけでは十分に注しえないものについては補注として巻末で詳述した。補注の番号は著者ごとに一から起こした。
一、注釈文の表記は新漢字新かなづかいにより、難読漢字の読みは（　）に入れてその語の下に置いた。ただし、引用文のかなづかいは原文どおりとし、それが旧かなである場合は補った読みがなも旧かなとした。
一、注釈内容は、先行研究の成果をとりいれながら、作品の主題、発想、構成、文体、語法などにかかわる事項注に重点を置き、必要な語釈を加えた。また、原則として、頭注は表現に密着しながら作品を客観的に読解していくことを主とし、補注では、典拠の考証、作品の特色や背景、成立事情、先行研究の紹介、検討など、作品をさらに味読していくための作品論を展開することを主とした。
一、本文・引用文以外に出す数字は、「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように記した。ただし、年号などを（　）の中に入れる場合は、洋数字により（明34・1）（大12・6）（昭13・8）のように示した。なおその際、明治以降の年号に限って、それぞれ、明、大、昭と略記した。
一、注釈文中では、書名は『　』、新聞・雑誌および作品名、論文名などは「　」で示すことを原則とした。

解説

北村透谷集解説

佐藤泰正

はじめに

「……その惨憺とした戦ひの跡には、拾つても拾つても尽きないやうな光つた形見が残つた。彼は私達と同時代にあつて、最も高く見、遠く見た人の一人だ」（「北村透谷二十七回忌に」）とは、透谷を評した藤村のことばとしてしばしば引かれるところである。たしかにそのことばどおり、藤村もまたその「形見」を拾いつつ、みずからの径を拓かんとしたひとりであった。初期の劇詩「琵琶法師」にはじまり、後期の「海へ」、さらには「夜明け前」に至るまでその随処に、われわれはその「形見」のありかを見いだすことができよう。

たとえば「海へ」の第五章「故国に帰りて」の末尾の一節――「お前が眼のあたり見た驚くべき大改革とは人の心に『推移』をば齎したらう、しかしながら人の奥に『改革』を齎したらうか」――この隅田川の水に向かって問いかける藤村の感慨はそのまま――「革命にあらず、移動なり。……知らず識らずこの移動の激浪に投じて、自から殺さざるもの稀なり」（「漫罵」明治二六・一〇）という、透谷晩期のことばを模したものであることは付言するまでもあるまい。その「改革」ならざる「推移」が、「強い判断力」や「歴史的の意志」の欠如から来ることを指摘しつつも、しかし透谷のあのみずからの身を破る痛烈なシニシズムも深い認識も、そこにはない。

「藤村はたれにもまして大きな影響を透谷から受けながら、しかもかれの鮮烈な生き方をついにまなばなかった」（三好行

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

雄）と評家は言う。また、「……藤村は何とかして生きたいとねがった。彼ら（独歩・藤村）はめいめいのねがいによって、透谷の破滅をきりひらいていったとみえる。しかし、彼らは何かを大きく跨いだのだ」（桶谷秀昭）とも言う。「長い年月の間私は北村君といふものをスタディして居た」と言いながら、ついにその「鮮烈な」生から「まなばなかった」、あるいはまなびえなかったものとは何か。彼らは「何かを大きく跨いだのだ」という――その「彼ら」とは、ひとり独歩や藤村のみならず、また後代の多くの文学者をも指すとして、そこになお踏み残されたものとは何か。

「余も亦国粋を好めり、然れども耕やさゞる可からざるの地を充分耕やされたりとして、鍔と鋤とを用ひざらんとするを好まず」（「『日本の言語』を読む」明治二二・七）とは、透谷の初期評文中の一節であるが、透谷の生涯とは、言わばこの言葉と先の晩期評文（「漫罵」）中のそれとの間を熾しく揺れ動いていたものであるとも言えよう。この「耕やさゞる可からざる」土壌を目して――ついに「革命にあらず、移動なり」と嘆ぜざるを得ざるに至った時、彼のなかで何かが大きく崩れ去ったはずである。明治二二年より二六年に至る、このわずかな期間に、透谷の主要な文業と活動の一切は深くたたみ込まれているのであるが、われわれは彼が耕さんとして、ついにみずから打ち棄てた「鍔と鋤」とを、今一度手に取り上げてみる必要があろう。おそらくそこにわれわれは、彼の遺したかけがえのない「形見」のいくつかを、鮮やかに見いだすことができるであろう。

入信まで――文学者透谷の誕生

北村透谷――本名は門太郎。明治元年一二月二九日（当時の陰暦では一一月一六日）、神奈川県足柄下郡小田原町万年四丁目五五八番地、旧唐人町に、父快蔵（二七歳）、母ユキ（二〇歳）の長男として生まれた。この時祖父玄快は五四歳、継祖母ミチ四三歳。北村家は代々小田原藩士にして藩医であったが、父快蔵は翌明治二年、昌平学校に学び、官途を需めて大蔵省記録局員、その他の職についた。この間明治六年、父母は生まれたばかりの透谷の弟垣穂をつれて上京、透谷のみはひとり残されて祖父母の手によって養育された。

「明治六年、生の父母は生を祖父母に托して東都に去れり、十一年まで五年間、生は全く祖父母の膝下に養育せられけり、

（中略）生の天性は不羈磊落、我儘気随なるに、此のやかましき祖父と我が利益には余り心配せぬ祖母との間に養育せられたるなれば、此に生が淡白なる小児思想は、或る奸曲なるむづかしき想像心にからまれて、物事に考へ深き性情を作りたるの事実は、決して蔽ふ可からざるあとなりとす」（石坂ミナ宛、明治二〇年八月一八日書簡）とは、透谷自身の語るところであるが、また同時に、母ユキの影響はそれ以上に深いものがあった。

……生の母は最も甚しき神経質の恐るべき人間なり、一家を修むるにも唯、己れの欲する如く、己れの画き出せる小さき模範の通りに、配下の者共を処理せんとする六づかしき将軍なり、偖て生の神経の過敏なる悪質は之れを母より受け、傲慢不羈なる性は之を父よりもらひたり。（前掲書簡）

幼時、生まれたばかりの弟だけを伴って出京した母に対し、その愛が弟のみに注がれていると信じ、長じては、その資産もほとんどは弟の手にわたるのではないかと疑う――この不幸な母と子の齟齬は、透谷の生涯にわたって底流するものであり、その作中に深い影を落としている。

〈狂ひはせず、静かに家に帰るなれ、／われを捨ておけ、汝は行きて、／ひとやのうちの家を守れかし、／おさらばよ、かねて背きしたらちねにも！〉（「蓬莱曲」明治二四・五）――ここに言う〈ひとやのうちの家〉とは、現世の牢獄のみならぬ、彼の生涯をつらぬく家への深い孤絶感をも示すものであろう。またその作中、ハムレットの見る亡霊にふれて――「狂公子にのみ見えて其母に見えざる」（「他界に対する観念」明治二五・一〇）云々という時、われわれはこのような詞句の背後にさえ、その母と子の微妙な葛藤の翳を読みとることができよう。〈狂ひはせず、静かに家に帰るなれ〉――おそらくはこの一句に、透谷の生涯をつらぬく深い「心の色」が濃くにじんでいる。

さて、この母はまた「普通のアンビションを抱け」る者として「生をして功名を成さしめんと思ふの情切なりければ、毎夜十二時頃までも、窮屈なる書机に向はしめ、母自身は是れが看守人たり」（前掲書簡）という。ここにまた少年透谷のそれとの、両者の「アンビション」をめぐる葛藤が重なってゆく。透谷のアンビションとは――まず「己れの一身を」「英雄豪傑の地位に置かん」とすることにはじまり、明治一四年父母とともに上京、泰明小学校に入るや、自由民権運動の最盛期を迎え、彼もまたこの「風潮に激発せられて、政治家たらんと目的を定むるに至り、奮つて自由の犠牲にもならんと」「従来のアンビションは悉く此一点に集合し、畏るべき勢力を以て」その「心を支配し始め」（前掲書簡）るに至る。しかし、この昂

揚は一五年泰明小学校を卒業後、環境の一変とともにわずか一年にして崩れ、さらに再び民権思想への情熱が蘇ったのは、東京専門学校入学後の翌年、明治一七年のことである。

「此時のアンビション」は先のそれとは異なり、「名利を貪らんとするの念慮は全く消え、憐む可き東洋の衰運を恢復すべき一個の大政治家となりて、己れの一身を苦しめ、万民の為めに大に計る所あらん」とするもの、「己れの身を宗教上のキリストの如くに政治上に尽力せん」（前掲書簡）とするものであったと言う。しかし、この政治活動への実践もまた翌一八年、大矢正夫から朝鮮革命計画と、その資金調達のための強盗決行に参加を求められ、彼らと訣別するに至って破れる。彼はこの時のことを作中に回想して、次のごとく述べている。

この時に至りて我は既に政界の醜状を悪くむの念漸く専らにして、利剣を把つて義友と事を共にするの志よりも、静かに白雲を趁ふて千峰万峰を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に余りしかども、私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。この第三回の行、われは髪を剃り筇を曳きて古人の跡を蹈み、自から意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大坂の義獄に与からざりしも、我が懐疑の所見朋友を失ひしによりて大に増進し、この後幾多の苦獄を経歴したるは又た是非もなし。（「三日幻境」明治二五・八、九）

彼はまたその書簡に、「彼等壮士の輩、何をか成さんとする、余は既に彼等の放縦にして共に計るに足らざるを知り、恍然として自ら其群を逃れたり」（石坂ミナ宛、明治二一年一月二一日書簡）とも述べているが、この朋友よりの離反訣別は、彼の心に「幾多の苦獄」を強いる深い傷痕を残すこととなる。ここに至って彼は「全くアンビションの梯子より落ち」、さらに一転して横浜に赴き商業に従事するが、「唯激烈なる企図を以て激烈なる全敗を取回へさんと企て」（父快蔵宛、明治二〇年八月下旬書簡）たこの計画も失敗し、「遂に再び一層の大敗軍に陥」（同上）ることとなる。こうして彼の生の実質をなした「アンビション」は決定的な崩壊を見、あの痛切な告白がなされる。

生の一身は名誉と功業を成さんと思ふの心にて固まりたり、此心を外にせば生の魂は無一物なり、生の脳病は死物にひとし、発狂するか白痴になるかの二にあらざるよりは、此心に離れて安穏なる生活を過ごす事を得ざるべし。（同父宛書簡）

この決定的な危機から彼を救いえたものが、石坂ミナとの出会いを通してのキリスト教入信であったことは言うまでもな

い。透谷が石坂昌孝の長女ミナを知ったのは明治一八年の夏、神奈川県南多摩郡鶴川村野津田の石坂家を訪ねた時のことである。当時ミナは透谷より三歳上の二一歳、父昌孝は神奈川県会議長をも勤めた自由党一派の政治家であった。その後二〇年七月、横浜の共立女学校を卒業後、東京本郷区竜岡町の父の隠れ家に帰省中のミナとの出会いから、二人の交情は急速に高まってゆく。一度はミナへの恋情を絶とうとして横浜へ走り、商業への再起を図らんとするが失敗。この苦悩変転のさなかに、はじめてミナを通して知ったキリスト教信仰への帰依の情が翻然と湧き起こって来る。この間の事情は、二〇年八月より翌二一年に至るミナや父快蔵宛の書簡につぶさに語られている。

さて、透谷における入信とは何か。父快蔵に言うごとく――その「傲慢不屈」なる「不信仰心」のゆえに、「貴重なる生命を覆没せんと」していた彼に「神の貴きを知らしめ」、救いの「援兵」として現われたのが石坂ミナであり、彼女こそは「実に第二の大矢」とも言うべき存在であった。しかし、そのミナへの恋情を絶たんとして、孤立無援の状態に自身を置いた時、彼は「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し、神に帰依す可きを発悟」（前掲父宛書簡）する。言わば神は第三の「援兵」として彼の前に現われ、ミナ（彼女は一致派―プレスビテリアン―の横浜海岸教会の信徒であった）の愛と導きなくして彼の入信はなかったと言えよう。かくして透谷は二一年三月四日、日本一致教会（後の日本基督教会）所属の数寄屋橋教会において牧師田村直臣より受洗、文学活動のかたわら、その生涯を伝道者として過ごすこととなる。

しかも注目すべきは透谷の場合、「未だ狂せざるを怪」み、白痴とならざるを奇とする」――その危機と崩壊において、言わば自己の全的否定において、入信の契機が生まれて来たことであり、これは藤村、独歩のみならず、後の多くの文学者の場合とも異なるところであろう。また、さらに注目すべきは、次の言葉にある。

利は人情の至性なり、慾は社会の流動体なり、利は海にして慾は陸なり、世の壮士は口に利を難じ慾を咎むるも、其利の為めに世を救はんとするを知らず、慾の為めに自ら責められるゝを悟らざるなり、此際に立つて屹然、俗界を脱する基督の兄弟ありて、利の制を設け、慾の境を定むるにあらざれば、滔々たる天下の悪弊は、風濤迅雷の猛勢を以て、日本の好天地を破壊し去らんとす、（中略）

計らざりき、余の傲慢なる見解の誤まれるを、教示するものあり、其を何物ぞと尋ぬれば、今我が身を捧げし神の教へなり、基督教の勢力なり、余は先きに天下の事成す可からざると思ひしは、人の力にて成する能はざるを悟りしなり、然

れども、此に至りて始めて神の力を借つて成さんとするの、新しき望を起さしめたり、（中略）

……玆に至つて、世に尽くし民に致さんとするの誠情は悖然として旧に帰れり、己れの権力を弄ばんとするの義侠心にあらずして、真理の兵卒たらんと望むの愛国心なり、我が技量を試みんとするにはあらずして、神の真意を世に行はんと欲するの至情なり、天下を以て、功名を戦はすの広野となさんとするにはあらずして、邦国を以て、神の聖徳を頒たんと思ふの微意にあるのみ、（石坂ミナ宛、明治二一年一月二一日書簡）

すでに明らかであろう――彼の筆は自己の裡なる「志士」「壮士」の輩の利俗を熾しく搏つとともに、「名誉と功業」に発する「アンビション」のすべては、神の名によって全的に否定される。その背後に、彼が「《北村門太郎の》一生中最も惨憺たる一週間」と名づけつつ、ついに語りえなかった、狂するか白痴となるかという「精神の奈落」（桶谷秀昭）があったとするなら、この回心の意味するものはまことに深い。おそらくこの言いがたくも深い苦悩の代価は、評家の言うごとく「独歩、蘆花、二葉亭」にして、なお支払われてはおらず、彼らはその「生涯においていくつかのアンビションを捨てかねている」（平岡敏夫）と言いうるであろう。回心はかくして透谷の主体を恢復せしめるとともに、おのずからに純乎たる「想世界」に向かわしめ、ここに文学者透谷が誕生する。その独自の意味をわれわれはまず、その詩業から見てゆくこととなろう。

「楚囚之詩」――詩作への試み

透谷の詩業はまず長詩「楚囚之詩」（明治二二・四）の試みにはじまる。

〈曾つて誤つて法を破り／政治の罪人として捕はれたり、／余と生死を誓ひし壮士等の／数多あるうちに余は其首領なり、／中に、余が最愛の／まだ蕾の花なる少女も、国の為とて諸共に／この花婿も花嫁も。〉

〈……遂に余は放されて、／大赦の大慈を感謝せり。／門を出れば、多くの朋友。／集ひ。余を迎へ来れり、／中にも余が最愛の花嫁は、／走り来りて余の手を握りたり、／彼れが眼にも余が眼にも仝じ涙――／又た多数の朋友は喜んで踏舞せり、／先きの可愛ゆき鶯も爰に来りて／再び美妙の調べを、衆に聞かせたり。〉

ここに一六連よりなる「楚囚之詩」の頭尾の一節を掲げたが、政治犯として獄舎につながれた主人公の苦悩と希望を記し

つつ、最後に大赦によって出獄し、相愛の花嫁と再会する――ここに注目されるのは牢獄、囚人という陰惨な世界を描きながら、不思議な明るさと楽天性が全篇をつらぬいていることであろう。そこには石坂ミナに導かれてのキリスト教への入信（前年三月）、さらにミナとの結婚（同一一月）からほど遠くない、当時の心境の反映も考えられるが、しかしそれにしても、ここに語られる〈自由〉も〈神〉も〈牢獄〉も、すべて外在的なものにすぎない。七五の定型を主調とする当時の詩壇にあって、「自我と現実との葛藤を投入しようとするとき、どうしても一種の『物語性』ともいうべきものを仮構し、そこに内面を仮託せざるをえなかった」。これを「もっとも徹底的につきとめ」んとして「楚囚之詩」が書かれたのであるとは評家（吉本隆明）の指摘するところであるが、しかし残念ながらこの作に、その「自我と現実との葛藤」の「投入」をみることはできない。「自由民権運動から離脱したことを精神上の傷手として、文学の世界に近づいて、とう晦し」（吉本）た透谷の挫折感、また逆に、後に彼の示した壮士たちの「志士意識」への熾しい否定の情も、ここに読みとることはできない。

すでに知られるごとく「楚囚之詩」が、透谷自身にかかわる「大阪事件」（明治一八年）の関係者の入獄や、この詩篇刊行の年の二月一一日憲法発布祝典に際し、国事犯の大赦が行なわれた事実を反映していることは言うまでもないが、〈誤つて法を破り〉と言い、〈放されて、／大赦の大慈を感謝せり〉という詩篇頭尾の詞句の示すごとく、ここにはいかなる意味においても、国事に身を挺して縛された者の昂も、また挫折の感すらもない。この内的な主体と衝迫の欠落は、何を示すものであろうか。おそらく「楚囚之詩」一篇は、みずからその序に語るごとく当時の文学界における「新体詩とか変体詩とかの議論が囂しく起り」「数多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至」ったことに刺激されたものであり、あえて「非常の改革、至大艱難の事業」の自負をもって試みられたものであろう。同じ二二年七月、先にふれた評文「『日本の言語』を読む」中にもみるごとく、「各国ともに有らざるなき詩（長詩、劇詩などの意であろう――筆者注）が独り我にあら」ざること、日本の文学がいまだ「揺籠の中に」あり、「耕やさざる可からざるの地」なりとの認識のもとに、「冗長に馬鹿らしく発達し居る」詩語を匡さんとして、自負するごとく脚韻を踏み、漢語調を多く用い、主語、述語、助辞の省略などさまざまなくふうがなされているが、詩の眼目たる内的律調の欠落は、何よりもこの詩の作因が、新体詩発生以来の改良意識という外的な影響にとどまることを明らかに語っている。

透谷の詩業を目して、その「敗北とは」「『楚囚之詩』の律調を、七五調にまで後退せしめたところで、想世界を現実世界

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com